



中学生のとき、私にとってアイドルだったサッカー選手のドラゴン・ストイコビッチ（旧ユーゴスラビア）が、「NATO STOP STRIKES」と試合中に見せた姿。高校生のときにテレビで見たアメリカ同時多発テロにより、崩れ落ちるビルの姿。なにがきっかけで、こんなことが起きてしまうのか知りたいとホロコースト教育資料センターkokoroにかかわるようになりました。

『アンネの日記』はみなさん、一度はその名前を聞いたことがあると思います。今年はそのアンネ・フランク生誕90年にあたります。ホロコーストの犠牲者としてもっとも有名な人物の一人です。当会は、第二次世界大戦時にナチス・ドイツとその占領下のヨーロッパで起きたホロコースト史を教材とし、差別や偏見の愚かさ、命の大切さを学ぶため訪問授業等の活動を行っています。

「ユダヤ人に生まれた」、ただそれだけの理由で殺された人の数は約600万人と言われています。またユダヤ人だけではなく、障害者やロマ（ジプシー）の人々も犠牲となりました。「第二次世界大戦」「ドイツ」と聞くと遠い昔、遠い国で起きたできごとを感じる人もいるかもしれません。しかし、差別、偏見…ホロコーストをつくりだしたものは、私たちの身のまわりに溢れています。

偏見や差別を生むのは「無知」や「無関心」

私は福祉施設の理事も務めているのですが、ボランティアに来た学生が「知的障害者と接したことがなくて、電車で同じ車両になると怖くてちがう車両に移っていた。でもボランティアを通して、怖さがなくなった」と話してくれたことがあ



命を尊ぶ、思いやりのある こころを育む

ホロコースト教育資料センター kokoro

田中 亮彦 さん

ります。その学生になぜ怖いと思ったのか、距離をとろうと思ったのか聞くと「知らなかったから。なにかに巻き込まれないよう、見ないふりをしていた」と答えてくれました。

これは障害者に対しての話ですが、自分とは異なる他者に対して知らないからと距離をとってしまうことは、だれにでもあるのではないかと思います。しかし、知らない、自分には関係ないと距離を置き、見えているものに蓋をしてしまうことの延長線上にホロコーストはあります。

身近なところから対話の機会をつくる

目の前で起きていることや社会のできごとを自分ごととしてとらえ、他者の気持ちを想像して思いやることは、だれもが大切なことだとわかっています。しかし、それを実践することはさまざまな理由でむずかしいときもあります。ホロコーストの歴史を通して、まずは、一人ひとりが、家族や友人といった身近な人のこと、学校や職場のことを立ち止まって考えたり、他者と対話する機会をつくっていったらと考えています。

【kokoroの活動】ホロコースト史を教材とした訪問授業等を行っています。年間約100カ所の学校や自治体からご依頼を受けています。総合的な学習、命の授業、道徳、国際理解や人権学習にぜひご活用ください。

たなか あきひこ/1984年東京生まれ。高校生のころからNPO法人ホロコースト教育資料センターkokoroに参加。現在、会の事務局長を務める。NPO法人しらゆり理事。

- 1 人として 田中亮彦
- 2 いまを見つめて 太田 愛
- 4 よりあってつむぐ 発達をゆたかに 乳幼児期から終末期まで
- 7 わたしの教材
- 8 グラビア きどあいらく
- 10 障害のある人の労働を考える 北の大地の仲間たち2019
- 13 被災地のいま 宮城・女川町

特集 憲法と私たち

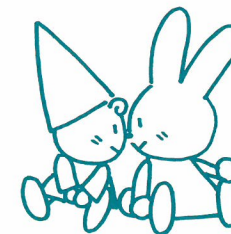
- 14 【対談】憲法の価値を語り合って 暉峻淑子×安田菜津紀
- 18 憲法ってなに？ 青龍美和子
- 20 T4作戦と障害者～ドイツを訪れて 鈴木真帆
- 22 辺野古県民投票を経て～対話を力に 元山仁士郎
- 24 私の戦争体験～徴兵検査、防空壕、疎開 松田春廣

- 25 世相を斬る！ いのちに優劣はあるのか 斎藤貴男
- 26 ニュースナビ 強制不妊手術裁判
- 28 いのち・発達を保障するということ 障害の重い子どもたちから学ぶ 細瀬富夫
- 32 この子と歩む 加来加奈子
- 35 生きる 大林正孝
- 36 ゼロから学ぶ 障害のある子ども・若者のセクシュアリティ 伊藤修毅
- 40 実践の魅力
- 43 隠岐の島だより／嗚呼 青春の大研究
- 44 みんなのひろば
- 46 ピース犬の満腹食べ歩き／BOOK
- 47 イベント／編集後記

裏表紙 NEGAI GALLERY

みんなの ねがい

2019年 8 月号
No.640



イラスト・デザイン
齋藤 知、渋谷真理子、永野徹子
橋野桃子、本村 蓮、光陽メディア

表紙のことは

西アフリカに位置する、ガーナ共和国。この国は日本が最も多くのカカオを輸入していることでも知られている。声をかけ合う人々の姿は陽気で、あいさつの言葉もどこかリズムカルだった。

アシャンティ州の村を取材していると、人懐っこい子どもたちが声をかけてくる。時にはラジオから流れる音楽で軽快に踊ってみせてくれる。娯楽施設があるわけでもなく、電気も不十分な村でも、人はささやかな楽しみを見出していた。彼らの生活の一端に触れながら、改めて思う。テレビから時折流れる、誰かを貶める笑いではなく、日常を抱きしめるような笑みがいい、と。



表紙=安田菜津紀

やすだ なつき/1987年神奈川県生まれ。Dialogue for People所属フォトジャーナリスト。東南アジア、中東、アフリカ、日本国内で難民や貧困、災害の取材を進める。東日本大震災以降は陸前高田市を中心に、被災地を記録。著書に『写真で伝える仕事—世界の子どもたちと向き合って』（日本写真企画）、他。